

「ハワイ大学 NICE プログラム参加報告書」

京都大学文学部・4年 石田夏月

① 学習成果

今回の派遣は、私にとって初めての海外渡航であり、留学だった。行先やプログラムの関係上、周囲には多くの日本人学生がいたが、私とは異なる専門分野を学び、異なる目標を持って集った彼らとの交流は非常に刺激的だった。私もさらなる努力をしなくてはと、とても励みになった。

私のクラスは3分の1の生徒が外国人であり、また日本人同士といえどもキャンパス内では常に英語で会話する毎日だった。コミュニケーションツールの一つとして英語は重要で、強制的に「話す」環境に身を置くことでスピーキング能力を高めようという動機からこの語学研修に参加したのだが、実際に生活をして、会話の種類に応じて求められる能力が変わってくることに気付いたこと、これが最も大きな収穫である。日本国内では、授業などで様々な場面を想定してスピーキング練習を行っていた。留学生活では、一日のうちに、友人との雑談、授業内での発表、店員との会話、ホストファミリーとの会話など、多種多様なレベル、フォーマル、インフォーマルな場面が登場する。知らない単語や言い回しは簡単に言い換え、最低限の意思を伝えることには不便しなかったが、アカデミックな会話をしたいときに、相応の語彙力が足りていないことを痛感した。また、友人と喋る際には、軽口や冗談が多く含まれていたため聞き取れなくてもあまり聞き返せず、早いテンポのリスニングに慣れる必要があると感じた。帰国後は、日常的に英語を聞く機会を増やすことに加え、正規の講義に備えて高度な語彙力の獲得に励みたいと思った。

クラス内では、ドイツ人、韓国人、中国人(香港)のクラスメイトとよく話をした。ヨーロッパといえば日本に対して「クールジャパン」、韓国中国といえば「反日」というようなステレオタイプの見方が存在するが、もちろん、個々人との会話はそのような枠は一切存在せず、自身が逆にステレオタイプに染まっていないか省みる機会となった。よくお互いの国の文化慣習を紹介し合った。ひらがな、カタカナ、漢字を何年かけて習得するか話したとき、ドイツ人の友人に大変驚かれたのを覚えている。韓国人の友人とは、大学受験熱が似ていること、韓国は煙草文化が健在だが日本では喫煙率が下がっていることなど、日常的な話をしたのが印象に残っている。

② 海外での経験

バスの乗り降りに当初苦労した。日本は何でも便利にできている、とはよく聞くんが、ドアが自動で開かないことに戸惑った。また、出てくる食事の量が多く、サイズも大きく驚いた。水が貴重であるため洗濯頻度が少ないことなど、生活様式の違いが新鮮だった。「要求を伝える」会話だけでなく、ホストファミリーや友人と「キャッチボールが続くよう心掛ける」会話が多いのが、旅行と一線を画す点だと感じた。

③ プログラム内容

プログラム初日に、リスニング(講堂で一斉に行うマーク試験)とスピーキング(先生との個別試験)のテストを行い、能力別に5段階10クラスに分かれた。私は一番上のAdvanced classに入ったが、3分の2が日本人、3分の1が外国人であり、帰国子女や英語学科の生徒、国内のスピーチコンテスト優勝者など、クラスメイトの多くは私より流暢にコミュニケーションが取れるように見えた。

授業内容はほとんど担任の先生に任されているため、各クラス大きく異なったようだ。私のクラスでは、2週間ハワイの歴史、独自言語、食や音楽文化などを学び、最後の一週間は2人ないし3人のチームに分かれて、それぞれ15分のプレゼンテーションを行った。私のテーマは"Identity of Japanese and Korean Immigrants in Hawai'i"である。授業は映像を見る時以外はコの字型に机を並べ、ディスカッションを行った。週2回1時間UHの学生と話す機会があり、フラのワークショップが一度あり、2度、校外学習があった。私のクラスはダウンタウンと真珠湾に出かけた。

ホームステイは私を含めて3人でひとつの家庭に泊まった。ビジネスでホストファミリーを申し出る家庭も多い中、フィリピン人の温かい家族に迎えられ幸運だった。晩ご飯後の雑談は、学校のことと政治の話題が多く、よく日本と比較して話し合った。ほかに、成人式の振袖写真や盆踊りの実演などは喜んでもらった。

④ 進路への影響

3週間という短期間、日本人の多いハワイという環境での語学研修でありながらも、知らない土地で海外生活を送るという体験ができたことは、より長期間の留学生活をイメージするうえで役立っている。